大宰府　再現ジオラマ　自然防衛

大宰府は、7 世紀から 12 世紀のあいだ、九州の事実上の政治・文化の中心であった。都市の場所は、その地域の地政学的特性をうまく利用できるように慎重に選ばれた。ジオラマは、周囲の山々や地形がいかに自然の障害を築き、潜在的侵入者からの強固な防御を提供したかを示している。

アジア本土に近いことから、大宰府は外交的中心地となった。その都市は、博多湾に入港する外国使節団が最初に立ち寄る港であった。しかし、7 世紀は、アジア大陸では政治的に不安定な状況が続いていたため、政府は大宰府があまりに海に近いことから、外国からの攻撃を受けやすいのではないかと心配したので水城を建てることを命じた。その水城とは 1 キロ以上の広範囲にわたる堀を伴う防壁で、現在の福岡市がある海岸平野からの潜在的攻撃を阻止する役割を果たした。四王寺山の山頂に築かれた大野城をはじめ、都市をさらに防御するために複数の要塞が建てられた。これらの防御施設跡は今日も残っている。

高官が大宰府に到着した時、彼らは指定された客館で歓待を受けた。黄色でハイライトされている場所がそのエリアである。訪問者はここに滞在する場合、居住している限りはその空間を実質的に支配していた。これは現在の大使館と同じである。